

Special Essay

論文 IT 化

泌尿器科学

野口 正典

年末に書斎の大掃除をしていると、25年前に初めて書いた投稿論文の資料が出てきた。これは医者になって初めてまとめた症例報告で400字詰め原稿用紙15枚ほどに草稿内容が書かれ、欄外に書き足す内容や訂正文が至る所に記入されていた。自分で納得できる内容になると原稿用紙にボールペンで清書し、助教授にまず見てもらいここでいろんな修正がはいり、最後に教授に提出してOKがもらえれば投稿できるという流れであったことを思い出した。一行訂正が入れば全て書き直して最終原稿ができあがるまで何回原稿用紙に同じ文章を書いたことだろう。添付する表は和文タイプライターで一字一字打って作っていたのを思い出す。したがって、論文を作成する場合にはできるだけ無駄をなくすため原稿用紙に文章を書く前に頭の中で趨向し考えを整理して書き始めた。それから4,5年後にワープロが普及しはじめ、すぐに購入して論文作成に利用した。そのころのワープロはタイプライターにわずか2行ほどのモニター画面がつくほどのお粗末な機械で非常に使いづらかった。しかしながら、論文作成においては以前のように訂正あるいは修正箇所ができてその部だけ変更してプリントアウトでき非常に楽になった。その後、ワープロはその限られた用途と機能ですぐにパソコンに取って代わられた。

論文作成には、参考文献検索が必須であるが、論文をまとめる際にはまず医局の図書でおおざっぱに該当しそうな医学雑誌をめくり、次に図書館で医局に置いてない雑誌を調べるという作業を行っていた。このような状況にあったわれわれの研修医時代は、診療で忙しいときでも「文献を調べに図書館に行ってきます。」と言えば図書館でしばしの休憩を取るスローライフが容認されていた。しかしながら、インターネットが普及し図書館の本が電子ジャーナル化されるようになり、自分の机の上のパソコンで図書館の文献検索が可能で全く図書館へ足を運ぶ必要がなくなった今ではスローライフを甘受することはできなくなっている。さらには図書館そのものがウェブ上の架空のものとなり実体が無くなる日が来るのかもしれない。

全ての領域でIT(情報技術)化はますます進んでいくことであろう。論文作成に必要なコピー、ペーストさらには音声入力などの文章作成技術はこれまで以上に容易になり世界中から論文検索を含めた種々の情報を集めることも瞬時に可能になるであろうが、全ての情報を頭の中に充満させ一つの論文という形にまとめ上げるのは人間の考えでありIT化ではできないことと信じている。